

「21世紀COEプログラム」(平成15年度採択)中間評価結果

機関名	東京大学	拠点番号	J04
申請分野	学際・複合・新領域		
拠点プログラム名称 (英訳名)	生物多様性・生態系再生研究拠点 Biodiversity and Ecosystem Restoration		
研究分野及びキーワード	〈研究分野:複合新領域〉(生物多様性保全)(生態系影響評価)(保全生物) (環境負荷低減技術)(環境修復技術)		
専攻等名	大学院農学生命科学研究科生圏システム学専攻,同農学国際専攻,同生物・環境工学専攻,同森林科学専攻,同応用生命工学専攻,海洋研究所海洋化学部門,同海洋生命科学部門,アジア生物資源環境研究センター,生物生産工学研究センター		
事業推進担当者	(拠点リーダー名) 鷲谷 いつみ 教授 他 17名		

◇拠点形成の目的、必要性・重要性等：大学からの報告書(平成17年4月現在)を抜粋

<p>&lt;本拠点がカバーする学問分野について&gt; 森林、農地、緑地、湿地、海洋などを対象にした自然資源管理や土地利用計画等に関わってきた農学生命科学及び海洋科学の諸分野と、生物多様性・健全な生態系の保全・維持という課題に寄与すべく発展し始めた環境情報学、保全生態学、環境修復学等の有機的な連携により、新たな総合的かつ実践的な科学の樹立をはかる。</p> <p>&lt;本拠点の目的&gt; 本拠点は、生物多様性の急激な低下、気候変動、環境汚染、土地劣化、資源枯渇など現代の人類が直面している深刻な生態系の機能不全の問題の解決をめざし、「生物多様性条約」「森林原則声明」「砂漠化対処条約」等の枠組みにも依拠しながら進められている生態系の保全・再生の取り組みを成功に導くために不可欠な、新たな科学の樹立を目指す。そのため、関連研究領域のダイナミックな再編により、1)人類にとっての喫緊の課題に貢献する、新たな研究領域の国際的な研究・情報交流拠点を確立し、2)21世紀の社会が求める総合的、俯瞰的視野を持った研究者ならびに社会の多様な分野で活躍する人材の育成を行うことを目的とする。</p> <p>&lt;計画：当初目的に対する進捗状況等&gt; モンゴル、インドネシアなどのアジア各地、鬼怒川、霞ヶ浦などの水辺エコトーンや里山などをフィールドとし、保全のための実践活動と深く結びついた研究を進め、学術・実践両面での成果を挙げつつある。これらには若手研究者・大学院生が主体的に取り組んだ。院生・若手が第一著者となる論文を170編以上公表するとともに、国内外で11件の国際シンポジウム・会議を主催・共催し、それらにも若手・院生が積極的に参加した。一方で、NGOや行政機関などと多くのシンポジウム・フォーラムなどを共催するとともに、研究フィールドでの市民・NGOとの協働事業、パンフレット・ホームページを通じた研究課題・成果に関する普及・情報交換を行った。本拠点の市民との協働による研究・活動は新聞等のメディアでも度々取り上げられるなど、社会的にも注目されている。</p> <p>&lt;本拠点の特色&gt; 生物多様性保全・生態系の再生において重要性の高い、陸域-陸水域-海洋域、半乾燥地などの移行帯を主なフィールドとし、異分野間の連携・協働に基づく、遺伝子から景観までのすべての階層を視野に入れた総合的・実践的な研究を進めている。また生態系の様々な不健全化の様相を生物・生態のプロセスに基づいて理解し、科学的な問題構造の把握を踏まえて、社会に解決の方向性や具体的な方策を提案している点が特色である。</p> <p>&lt;本拠点のCOEとしての重要性・発展性&gt; 生物多様性の保全や健全性が損なわれた生態系の再生は、21世紀の人類の最優先課題といえる持続可能性の確保のために欠かせない。これに対処する国際的な枠組みや国内の新しい法制度が整備されつつあるが、具体的な手法や技術には科学的に検討の必要な課題が多い。本拠点は、そのような社会要請に応え、研究面から実際の保全・再生事業をリードする一方で、日本・アジアのみならず、より広く生物多様性・生態系再生に適用できる科学的指針や技術の確立を通じて、21世紀の環境再生の潮流をより確かなものとするに寄与する。</p> <p>&lt;本プログラム終了後に期待される研究・教育の成果&gt; 生物多様性保全・生態系再生に関わる総合的な研究領域が確立し、また国内外の研究者および実践者・実務者のネットワークが樹立・強化され、特に日本とアジア諸国間の情報交流・発信拠点を確立することが期待される。また開かれた拠点として多くの若手研究者、行政の実務担当者、市民などを研究教育活動に受け入れることにより、俯瞰的な視野から新たな環境の課題に総合的に取り組むことのできる研究者や実務者などの人材を多く社会に輩出することを目指す。</p> <p>&lt;本拠点における学術的・社会的意義等&gt; 現場における実証を経た研究成果を多数の学術論文や専門書・一般書として公表することにより、この新規科学領域の国際的なスタンダードを樹立する。そのことは同時に参加研究者の出身学問領域の新たな意味づけにつながり、それらの領域の発展にも大きく寄与することが期待される。また協働事業による生物多様性・生態系再生の科学的な推進方策、手順・手法などに関して、広く適用可能な指針や技術を確立し、事業そのものを通じて、また多様なメディアを通じて社会に普及する。</p>
--

◇21世紀COEプログラム委員会における評価

<p>(総括評価) 当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要と判断される。</p>
<p>(コメント) 生物多様性の基礎研究から市民活動まで着実に進め、個々の研究については高い水準で多くの成果が上がり、人材も育ってきている。ただ、有機的連携の面では、グループ間の連携が不十分で、COE全体としての統一性に欠ける。また自然再生についての工学的、実践的取り組みが進む一方で、自然再生の総体を貫く理論的考察が十分とはいえない。本プログラムが全体としてどのような拠点を目指すのかを再度明確にした上で、各研究課題間の双方向性をより高め、点から線、そして面へと広げる努力が必要である。また、政策論に関する社会科学研究との連携も目指し、総体としての自然再生について理論的考察を深め、新たな総合科学領域の確立に向けてより強いリーダーシップを発揮されたい。</p>